

Dedication

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sato, Kiyokazu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061721

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



前田 隆先生のご退職にあたって

金沢大学経済学経営学系長 佐藤 清和

前田隆教授は典型的な研究者である。そのご研究の真髄は、それまで誰も解けなかった問題に、まったく異なる視点からアプローチすることにより真の「解」を与えることを至上の悦びとする、というところにある。

高校時代の国語や英語の試験では、出題の意図が不鮮明で、いくら答案を書いて納得できないばかりか、むしろ出題に間違いがあるのではと疑うばかりで、そんな勉強が嫌いだった。これに対して数学は論点が明晰であり、解答も短く書く方がエレガントだと評価されるため興味が沸いた。思い起こせば大学時代の数学はすべて満点だった。

1979年4月、前田先生は九州大学大学院で経済学研究科が改組により経営工学科を設置するというタイミングで大学院に進学されたことで、今日に至る学究への道が開かれることとなった。修士課程では、株価の確率過程に基づく確率制御問題に取り組みされた。当時の日本で、この分野の研究者は文系はもとより理系でも皆無ではなかったかと思われるが、最適制御理論が大発展する草創期にあって、未開拓の領域に鋭意取り組まれたことには相当の勇気が必要であり、また研究上の困難が伴ったと思われる。

前田先生は、修士課程を修了とともに長崎大学に助手として着任され、講師を経て1985年には助教授に昇進された。長崎大学着任の際、せっかく博士課程に進んで博士になれるのに就職するのはもったいないと父君に言われたそうである。その後、1986年4月に金沢大学経済学部に移られた前田先生は、金沢城内にあったキャンパスで「近代経済学（いわゆる近経）」をご担当された。その時の講義内容は、現在のミクロ経済学とマクロ経済学の両方にわたる広範な内容に及ぶものであった。

1997年4月経済学部教授に昇進された前田先生は、1989年ビジティング・スカラーとして、カリフォルニア大学バークレー校に滞在され、制御理論で

著名なジョージ・ライトマン博士に師事され、最適制御の視点から経済理論を構築することを目的として研究に打ち込まれた。ある日、ライトマン博士に「大不況に襲われた時、Takashiはどんな経済対策が有効だと思うか？」と問われ、前田先生はここぞとばかりに持論を述べられたそうだが、これに対して「その対策とは何秒後に効果を発揮するのか。その効果が表れるまでに何人が命を落とすのか？」と聞かれ、本場の経済学の精髓に触れたと言われている。

当時のパークレーには、一般均衡解の存在定理を示したジェラルド・ドブルーや不完備情報ゲームで著名なジョン・ハーサニがおり、また近くのスタンフォードには、あのケネス・アローがいた。彼らは前田先生に会うと「Hi, Takashi!」と言ってハグすると、そのままランチに連れていかれ研究の話に没頭したという。経済学研究者としては羨ましい限りの体験であるが、前田先生にとって、このハグだけはあまり気持ちのいいものではなかったと述懐されている。

確率制御論は状態変数として確率事象を観測対象とする最適化問題を考察する数学理論であるが、前田先生によれば、最適化を目的とする方程式を解くという定式化された議論に留まることなく、確率分布やそれに従う確率過程の性質そのものを考察することに難題だが面白い問題があるという。このような確率分布に関する議論となれば、確率分布に関する測度論や解析学からの批判が展開されることは自明だが、経済学的に意味のある視点から考察することで、全く新しい自由な発想が可能となり、あらたな解＝定理が生み出されるという。このような姿勢こそ、眼前の研究課題が有する制約条件下にあって自らの好奇心の最大化を実現せんとする、前田流の研究法だといえるだろう。

また前田先生は、論文を執筆することは友人を増やすことだとも言われる。難しい問題を解くことの喜びは研究のモチベーションを高めるが、それはどこまでも孤独な作業の連続である。しかしながら、これは決して孤立するための行動なのではなく、生み出された研究成果を通じた交流が企図された行為なのである。しばしば投稿論文がリジェクトされて怒る人がいるが、前田先生にはその気持ちが分からない。なぜなら、リジェクトする人というのは、

真剣に研究と向き合ってくれた末に、自分とは異なる考え方をもち、また自分の気付かなかったことを指摘してくれる興味深い人なのだから。したがって、論文とは書けば書くほど、そのような知己を増やしてくれるところが楽しいのである。前田先生の多くの論文が英語で執筆されているのも、昨今のグローバル騒ぎに乗じたものではなく、自身の論文を世界の識者に読んでもらうための手段の一つに過ぎないとのことである（これによるハグの弊害は既述のとおりである）。

これまで公刊された前田先生の論文は、リジェクトされた1篇を除いて、すべて権威ある専門誌に掲載されている。ただし、残念ながらその研究内容を解説するためには、「位相および集合論」、「代数学(群論)」、さらには「多様体」について学ぶ必要があり、当然ながら筆者にはそれを為す能力と時間が圧倒的に不足している。この不足を補填するため、ここでは前田先生より伝授された「レシーブされるための論文執筆の極意」を披露することで、ご研究内容に関する説明責任を解除していただくこととする。

その秘訣とは、(1)他者が驚く着想を示す、(2)その着想が成果として結実するものであることを確信する、(3)帰結に対する正しさを証明する、という3段階のステップにあると言われている。とりわけ(1)の着想というのは、冒頭に述べたように、これまで誰にも解けていない問題を取り上げ、これに対して独自の方法によって「解」を与えることだという。しかしながら、まずもってこの誰も解けない問題を見出すことが難しいことは、研究者であれば誰しもが日々実感しているところであろう。なぜなら、一般に解けない問題というのは、そもそも教科書には書かれていないからである。フェルマーの最終定理が、彼の著作の片隅にメモ書きで記されていたことは、その典型である。

つまり、ここで言われているのは、ただ厳密な解析解を導くというのは計算であって創造ではない(無論、有用でないということではない)。さりとて解析解が存在しない場合であっても、これをシミュレーションによる近似解で代替すれば良いというのではなく、ここで先人とは異なる視点や発想から問題それ自体を見つめ直すことによって、あらたな解を発見(再発見)することを第一義とするという研究姿勢である。これはあらたな求解過程を提示すること以上に、問題(あるいは現象)そのものが有する真の意義を浮き

彫りするという意味で大変に興味深い方法論だといえるだろう。

以上のような研究者としての前田先生は、金沢大学が学域制に改組して後の経済学類長を2期、また経済学経営学系長を1期務められ、大学人としても大きな貢献をされていることを記さないわけにはいかない。

末尾ながら、経済学経営学系のスタッフ一同を代表して、長年にわたる前田先生の研究活動、教育および学生指導、ならびに大学の管理・運営にかかわる御貢献に心より御礼申し上げる次第である。